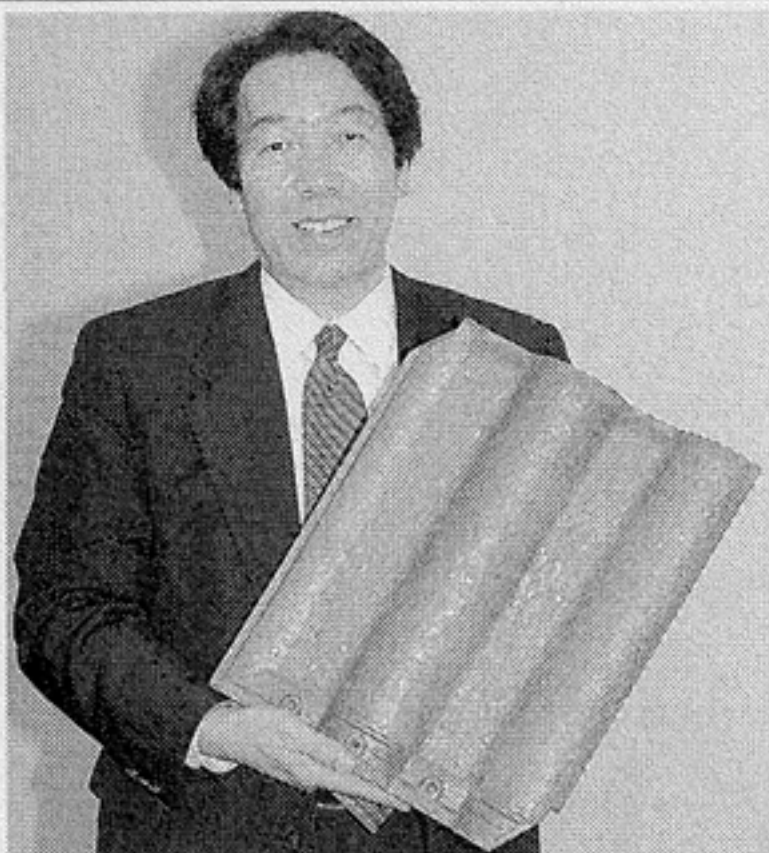


# 軽量瓦開発 今秋発売へ



開発した軽量瓦を手に「全国に売り込みたい」と話す大木社長

大津市のベンチャー企業「大木工芸」(上田上中野町、大木武彦社長)が、龍谷大の指導で瓦に1600度を超す超高温で焼いた特殊炭素を混ぜ、従来より20—40%軽くすることに成功

した。強度は変わらず、熱伝導がいいので融雪瓦にできるうえ、光をよく反射するため、夏は温度が上がりにくい。今秋にもメーカーに技術提供し、販売を始めたいという。

20

大津のベンチャー企業  
龍谷大の指導で

40%減、強度は同じ

特殊炭素は、間伐材や流木、建築廃材を、金属の触媒による化学反応で通常より高温で焼いて作る。これを陶器やセメントなどの瓦の材料に10—40%練り込むと、20—40%軽くなった。

瓦の軽量化は、阪神大震災で瓦屋根の重さで倒壊した住宅が続出して注目されたが、小さな空洞をつくって軽くする技術が多く、強度が落ちる問題があった。同社製品は、軽い炭素を使った分が軽くなるだけなので強度は落ちず、間伐材や廃棄物を使うことでコストも下がる。

特殊炭素は、製鉄工場などで一キロ当たり七十円程度で作ることができ、瓦の製造コストは10%程度上がるが、大量生産すれば従来品と同じ価格での販売もできる。

同社は一九九七年六月から同大の産学交流機関、エクステンションセンターの貸し研究室(レンタルラボ)に入居して、炭を使った様々な新製品開発に取り組んでいる。大木社長は「軽量化で瓦職人の重労働も軽減され、輸送コストも下がる。幅広く売り出したい」と意気込んでいる。